

一、山の高校生

「ね、聞てる？あの噂」

「噂？」

「あれだよあれ、最近一番有名な怪談」

「あの廃棄のアパート？」

「違うよ、あれも最新じゃない。山の怪談だ」

「え、それはまだ聞こえないね」

「あれは……」

助けてくれ。

「一郎、何を言った？」

零一は後ろの友達に聞いて見ましたが、彼の顔には戸惑いがあふれている。

「いいえ、全然喋ってないよ？」

「あれ、おかしいな……」

零一は周りを見回して、小道の両側を木々や雑草が茂っていて、ここは特に蒸し暑い。

何の不自然こともうない、ただ鳥の鳴き声が時々出して。

「何か聞こえた？」

「や、気のせいか……」

「じゃさっさと歩いて」

一郎は俺の側を歩いた。

「このままぐずぐずしていたら、僕たちはあの小屋に遅くなるよ」

「ああ」

零一は顔を上げて、まばらな木の葉の隙間から空を見て。もう赤みを帯びている、そろそろ夕暮れ時だ。

リュックサックの紐を引いて、先ほど聞いた音がすぐ忘れられてしまう。俺は小道に沿って歩き続けて。

やっと暗くなる前に、恒例の小屋につきました。

ややざらざらした板でできた小屋は、数十年前の林守が自分で作ったという。今はもう政府が建てた新しい部屋に引っ越した。ここは廃棄された。今は登山者たちの休みと宿泊の場合だ。

一郎は前を歩いて、階段を上がり、部屋のドアを押し開けた。

「お邪魔します」

「おお、やっぱり君たちね」

部屋に先に来た人がいる。その中の四十歳ぐらいのおじさんが親切に手を振って挨拶して。

「あ、山田さん、一年ぶり」

零一はカバンを置いて、彼に挨拶して。山田さんは彼たち三年前に知り合った登山の仲間。その後毎年、この山に来た時、基本的に彼に会えた。

部屋の中でまだ二人がいる。一つは俺より年齢ちよつと上の男子。茶色のTシャツと濃い緑のズボンを着いて。こんな暑い天気でも、黒の帽子をかぶって。零一の視線を感じて、彼は顔を上げてフレンドリーに笑った。

もう一つは若い女性。先からずっと本を読んで、時々軽い笑い声をする。多分零一たちの存在を感じしない。

「あ、真弓ちゃんはそんな感じだ。後で挨拶しよう」

山田さんは零一の視線に気づき、笑いながら説明した。

一郎と一緒に周りを掃除して、宿泊の準備をした。すべてが終わる時はもう夜だ。山田さんたちもう個別アルコールを火元にして、食物を温め始めた。

食べる時、登山者皆の距離感も短くなった。話の中零一もあの二人について基本的な認識ができた。

「だから、真弓さんは山田おじさんの姪？」

「なんだ、そうのびくりの語気」

「いや、でも山田さんその顔……」

「俺の顔がなんだよ！」

山田さんは手の中の箸を振って、俺を殴るふりをした。

「でも本当に似てないね、真弓ちゃんそんなに可愛いし。」

「あれはそうです」

「山田さんの娘はもつと可愛いよ」

先からずっとニヤニヤしての真弓ちゃん突然話した。彼女の話しを聞いて、山田さんうぬぼれて顔を上げる。

「そう！うちの娘、世界一の可愛い！」

「嘘！」

「……」

「そう言えば、この町最近一番有名な怪談知ってる。」

夕食が終わったら、懐中電灯を光源にして、みんなが集まって話をして。井堂さん——と帽子をかぶって男、突然その話題を出した。

「なにに、怪談？」

真弓ちゃんを目が輝いて、興奮して問い詰める。

「怪談が…確かにこの町の怪談が多いね。」

「あ、去年の時は確か…汚れた花嫁？そよ名前でしょう？」

「あ、あれ俺も聞いた、最近までまだ目撃者があるよ」

「いいえ、僕が言いたいのはこの怪談ではなく」

井堂さんは俺たちを見回りました。零一たちは彼の話を真剣に聞いてことが確認した後、眼鏡を支えてから話し続く。

「この怪談の名前は、出られない人」

「半年前のあの事件、山田さん、地元の人として絶対聞いたの？ここに一人で登山に来た高校生、道がよくわからないので、この小屋が見つからず、夜まで山林の中を歩いていた。」

「誰も知らないあの夜に何があった。最後に捜索員が見つけたのは、ただ彼のリュックサック、そして彼の下半身」

「手を切られたようなか下半身」

井堂さんは手で引き裂くような動作をした、その傷の怖さを示すために。

「その後、この山が変な噂が出した」

「あの高校生は、まだこの山にいる。自分の足がない、ずっと呼んでいる、誰が彼をここから連れてほしい」

「助けを求める声に沿う親切な人たちは、次の日には下の山道で死んでいるのが見つけた。」

「どんな天気でも、死体は氷のように冷たい」

「そして死体の周りに、必ず変な痕跡がある」

「まるで、何かが地面を引きずっている跡……」

静。

「やあ、そんなに怖い話しじゃないね。」

零一は初めてこの沈黙を破った。

「零一、それは失礼だ」

「悪い悪い、変な意味がない」

「いいえ、気にしない。確かに物語を苦手だ。」

「私はそよ怪談好きだよ！」

「この新聞確かに聞いたけど、怪談は初めてね」

みんなはあれこれと話し始め、また雰囲気盛り返した。

「そう言えば、あの怪談の中、あの高校生はどうやって助けを求めるの？」

真弓ちゃんは突然問題を出して。

「確か……」

井堂さんは眼鏡を手にして考えた。

「助けてくれ、かな？」

いやいやいや、偶然だろう。

防湿マットの上に横になって。零一の頭の中でまた先の話。

皆もう寝てだ。

井堂くん言えた怪談と午後道で聞こえた声。

完全一致。

でも、ただの偶然だな。

も一度自分を慰めた。

だて、お化けとか幽霊とか、現実には全然存在しない。

そう思う零一、眠気を防ぎきれず、頭いっぱい妄想で眠りに落ちた。

夢中、ずっとただ上半身の男性に追いかけられて走る。どんなに逃げても、彼と零一の距離は縮まっている。とうとう彼に捕まった。

「助けてくれ」

彼はこの言葉を繰り返しながら、ゆっくりと頭を上げた。

井堂くんの顔だ。

「すー！」

零一は息を吸って、ぱっと目を開けて座って、息を切らしていた。

「夢、夢が」

頭の汗を拭いても、夏の夜は蒸し暑い。気を付けて、周りの床を手探りながら、水筒を探して。

本当に暗いな。

まで。

暗い？

動作が一時停止。この小屋には電気がないが、窓がある。今夜もとても晴れて天気、先ほど話し時まだ窓の外から月の光がこぼれてきた。

じゃ今の闇一体…

零一は息を殺して、できるだけ軽く窓のほうを向いてみる。人の影が窓の前に遮られている。月光が彼の輪郭を描き出して。

「真弓ちゃん？」

「しー、他の人はまだ寝ている」

可愛い声、確か真弓ちゃんだ。

「何で起きた？」

零一も声を小さくした。

「寝る前に水を飲み過ぎ……」

「ああごめんね！」

「いいえ、私は気にしない。逆に零一さんはどうしましたか？悪夢？」

「ああ」

零一は自分の頭を搔いて。

「井堂くんの怪談が……」

「え、怖い話じゃない、と言いたる。」

真弓ちゃんは小声で笑っているようで、零一も恥ずかしいと思って、わざと話題を広げた。

「あとう、俺も一緒に外へ行きましようか？」

「零一さん、このように話をするとう女の子に嫌な思いをさせますよ？」

真弓ちゃんは手を振って、多分懐中電灯を持っている。

「光源があります。そして私も遠く離れません。何かあったら大声で叫んで、その時は助けに来てね。」

真弓ちゃんはそう言いて、軽く歩きた。眠気を防ぎきれず、また横になった。

「……起きて！」

でも今度、目を閉じると一秒ようで、誰かが俺を揺り起こした。

「零一！起きて！」

なんだよ。

苦労して目を開けたら、一郎の焦った顔が見えた。

「……まだ夜だよね、なんだ？」

部屋の中の明かりは太陽のためではなく、懐中電灯の光だ。

「真弓ちゃん、真弓ちゃんが消えた！」

「はあ？真弓ちゃんはただトイレに行くだ」

「違う！」

一郎は懐中電灯の方向を調整して、小屋の入口に向かった。

最初は何も気づけない、ちょっと見てたら違和感を感じる。

「あの痕跡……？」

はつきりしない白い跡が玄関から入ってきて、一番ドアへ近くに寝ていた山田さんのところに消えて、また反対側の床に現れて、そのまま奥の真弓が寝ているところまで来ました。

「井堂くんと言え、あの高校生だ。」

一郎の顔色が悪い。

「あの高校生？あれはただの怪談だろ？例えあの高校生としても、どうやってこの痕跡ができ……」

零一の話が急に止まって、自分も頭の中の考えにびっくりした。

「嘘だろ……」

「僕最初聞いた時もそう思う……」

「脊椎骨……?」

「せめて井堂くんはそう言えた」

「まで、そう言えば!」

零一が想像を始めた、すべての人が熟睡している時に、一つ上半身だけの人が両手で前に這って、体の外に出る脊椎骨が地面に白い跡をつけている。彼はこのように俺たちの熟睡する体を登った、真弓の身の回りまで登り。

一郎の顔色が悪い、見えないが、自分の顔色も彼より良くないと思う。

「……これは本当に、気持ち悪い」

「……同感」

「山田さんと井堂くんは?」

先ほど周りを見たが、俺たち二人以外に他の人はいない。

「山田さんは最初から真弓ちゃんを探しに出かけた、井堂くんもう一緒」

一郎は立ち上がって、装備を確認している。

「君もう一緒に来て、嫌な予感がする」

「ああ、俺も同じ」

夢中のあの顔も一度目の前に浮かぶ。

井堂くんが…

自分が間違えたらいいなあ。

夜の森には太陽の光はない。自身の生い茂った草木は環境を蒸し暑くしている。このような環境に歩いてはまったく残酷な刑罰。

「この道で間違えない？」

水を飲んで、ピンを振って、残りの水の音を聞いて、もう一口飲む誘惑を我慢した。

「井堂くんの怪談に言いたる？被害者の死体は全部下山途中の道で発見された。具体的な位置が分からない、でも方向が間違えない」

一郎は振り向かず、説明しながら歩き続けた。彼のハスキーな声を聞いて、彼の状態もよくない。

「いや、でもあれはただの怪談でしょう?」

考えれば考えるほど井堂がおかしいと思う。

「最初突然この怪談を話しは井堂、変な痕跡を発見した時、これは半身男と言いたもう井堂。ずっと彼がその怪談を繰り返し強調しただろう」

「君の主張は?」

「分からん、ただこれはあまりにも偶然だ」

一郎は足を止めて、その場に立ってしばらく考えて、やっと引き続き前進して。

「……いいえ、理由がないだろう」

隣の木から黄色のクールドライフトを拾いて一郎に渡した。これはもう七本目だ。

「理由?」

「だって、僕たちは初めて見たでしょう?その前にお互い知らないのに、わざわざ他人を害するなんて理由がない」

「万一彼が無差別の罠だったら」

「いやそう考えれば皆が加害者の可能性もうある。山田さんの方がもっとおやしい」

「山田さん?」

「ほら」

一郎は手を伸ばして指を折って分析している。

「先ず山田さんは僕たちの行方が分かるようね？僕たちもう三回目ここに来た、真弓ちゃん本来と彼一緒に来たので、ただ井堂くんが分からない。そして山田さんもうその町の住民。あの時は自分がその怪談を聞いてないと言え、嘘の可能性もある」

「いや、真弓ちゃんは山田さんの姪だろう？なぜ彼女を……」

「でも最初あの声が聞いているの君だろう。」

「話が突然止まった。零一は口を開いた、声が一時的に出てこない。」

「なぜ……」

「……している？」

一郎はため息をついた。
「ばれてはよう、井堂くんが言いた時に。君の顔色がいきなり変えた。そして午後僕に聞いたらもう明らかに変わった。ただ一つの問題がある」

一郎は片手をあげて額を摸んだ。

「あの声を聞いた人は君だ、なぜ真弓ちゃんが消えた？」

コールドライトに従って、零一たちは引き続き前進して。目尻に特殊な色の光が現れて。近くで見ると、前の黄色のコールドライトは違って、今度は赤いだ。

あれ、黄色はないの？

零一はそう思って、これを拾い上げて一郎に渡すつもりだ。一郎はとても真剣な顔でこのコールドライトを見ている。

「なんだ？」

「いや、出発前にも言ったように、もし真弓ちゃんを見つけたら、赤色に使える。もし彼らももう真弓ちゃんを救いたら、白い色に使える。僕たちが相手を逃して引き続き探し続けることを防止して」

「じゃもう探したら？ いいじゃ」

「これは確かにいいけど……でも、この周りに、ちょっと変じゃない？」

「……静かすぎ」

いつからか、周りには俺たち以外の音がしなくなれた。静かなのは山林の中ではない。

「気のせいだろうが、温度も下がったようだ」

「山田さんたち……大丈夫かな……」

「多分大丈夫。今では、小さい声も遠くまで聞こえる。まだ変な声を聞かないでしょう？」

「……それは良かった」

心の不安を片付けて前進していくと、山田さんたちにはまだ会っていないのに、音が聞こえた。

山中でよく見かける動物や昆虫の声ではなく、人の話し声。

「あれは確か……真弓ちゃんの声だ」

「ああ」

一郎の声がちよつと震える。

「彼女話しの相手は、誰？」

聞こえるのは真弓ちゃんの声だけ、誰も返事しない。でも彼女このまま自分で会話を進めていくと、時々止まって、相手の返事を聞いているような気がした。

俺と一郎は声を出さずに、ゆっくりと音のするところへ行き。

あれは確かに真弓ちゃんだ。

今の場所は、十分ぐらい歩いたらこの山を離れて道路に着ける。

でも彼女はずつと同じところをぐるぐる回っている。

地上の足跡から見ると、彼女はもうここを長い間回っていた。

「……大丈夫、すぐにここから離れた、お姉さんを信じてね」

彼女は誰かを慰めるように独り言を言っている。

俺たちを見ると、ただ彼女一人だけ。

いや、違う。

俺は自分に何か問題があるのではないかと疑い。

先まで何も無い真弓ちゃんの背中に、黒い霧がある。

「二郎、見たが？」

「何？」

一郎に霧の存在を説明しようとしたが、すぐに無駄なことに気づきたー彼は霧が全く見えなくて、午後の時にその音が聞こえないと同じ。

視線を真弓ちゃんに戻して、零一の呼吸が急に止まった。

霧もない。

真弓ちゃんの背中に、あの高校生の姿を完全に見えた。

灰色の白い肌は、完全に生命力を失っていた。腕には長い傷があり、十本の爪は完全に開いて、指を黒い血だらけで、恐らく両手で山の中を移動した原因で。腹腔は全体的にしぼんでいて、内蔵は完全に存在しなくなつて、ただ半分の脊椎骨だけが残つて中から現れてきて。真弓ちゃんの足どりに従つて空中でたらつと揺れて、時々彼女の背中をたたいている。真弓ちゃんはまだ感じていないよう、顔色が正常。

「どうした、真弓ちゃんの状態がやばい？」

一郎はその幽霊が見えないので、俺の表情を見て、今の状況を判断するしかない。

「いや、やばいかどうか……彼は人を殺す気がない」

最初は彼の外見に驚きたが、今までは静かに真弓ちゃんの背中に横たわって。真弓ちゃんにも傷はない。少なくとも今までその幽霊は彼女を傷つけたことがない。

そう思ってた時、真弓ちゃんはまだぐるぐる回り、零一をじっと彼女の姿を見ながら考え始まった。突然、真弓ちゃんは振り向いて、零一の視線と幽霊が直接にあった。

「……」
「……」

真弓ちゃんの動作は突然止まって、そのままあっすぐにそこに立って、幽霊に零一を見ている。

死魚のように光沢を失った瞳は零一の目を見つめている。このときは全く動きがなく、全身がこわばっている。

「ばれだ？」

「なぜ？」

「今どうしたらいいの？」

頭の中の無数の考えがぐるぐる回っています。体が全くついてない。零一はただそのまま見ている、彼を真弓ちゃんの背中から飛び降り、両手を地面に這って零一に近づいて。

見られない。

彼に沿って視線を移動すると、完全にばれた。

頭の中はわかっています、自分の行動を抑えられない。

「あ、やっぱり君は、見える人だ」

彼は零一の前に登って、顔を上げて、口元を引っ張って不自然な笑顔を見せた。

彼の話に従って、真弓ちゃんは急に地面に倒れた。一郎は急いで真弓ちゃんを支えに行けた。零一はその場でこの幽霊と二人きりになり。

「よかった、これで、ようやくここから出したら」

血と泥にまみれた手がゆっくりと足首に伸びてきて、神経が崩壊して、零一は大声で叫んで後ろに走っている。

激しく木にぶつかり、顔が麻痺して、でも素早く起きて、林の中に走って行けて。後ろで一郎が何かを叫んでいるようですが、もう俺の注意を引けない。

逃げる。

逃げる。

逃げる

何も考えない、ただこの思い方だけ。

しかし、小説や映画の中では、人間は恐怖のために体力を無視して暴走してのこと、全部嘘だ。

現実には、恐怖があなたの呼吸をかき乱す、普通の動作をいつもよりさらに多くの体力を消耗された。

何分間も走らなかったので、足が柔らかくなり、泥の中に倒れた。

零一は地面に倒れていて、瀕死の溺れる人のように手足を無駄に振り回している。一センチでもいいから、逃げ続けたい。

パサー。

後ろから声が来た。

彼が来る。

零一は絶望的に意識した。これが終わりだ。

登山に来ただけ、なぜこんなことがある？

死にたくない。

死にたくない。

「俺、死にたくない……」

その手は俺の顔に近づいてきた。

涙が止まらないのは落ちて、大声で叫ぶのさえ乗れない。俺は自分の生きたい希望をささやくしかない。

「ああ、死なないよ」

見知らぬ男の声が突然鳴り響いた。

その手は突然炎に触れたようにすくんでいった。半身男は振り向いて反対側を見て、両手を広げて、動物のように相手を威嚇したが、その人を見てからまた震え始めた。

最後の力を尽くして目を開けて、暗い環境の中でその人を見極めようとして。ただ短い髪ぐらいで、濃い色の上着を着ている男性しか確認できる。

男の話はまだ続ける。

「すまん、最初は確かに僕が勝手に君をここに残したと主張していたが、帰りの意志がこんなに強くて、他人を傷つけ始まった……」

男の話がまだ終わらないうちに、半身男が零一にとびかかってきた。近くにいる恐怖の姿を見て、零一は目を白黒させて、気絶した。

「え、これで終わり?」

「終わったのも突然ですよね」

「あの男は?あの男一体どの人?」

物語の続きを気にしながら、友達の話をどンドン出した。

「いや、でも確かに俺も気絶したので、何にも知らない」

零一は笑って両手を上げて、友達の不満をなだめている。

「はいはい、零一は病院から帰って来たばかりで、十分な休みが必要だ」

一郎がみんなの囲みから脱がせてくれて、感謝の気持ちで彼に手を振ってくれた。彼は眼鏡を上げた、いつものように冷たい表情。

「気にするな、あの時僕は何にもしない」

「あの時誰もできることがない、気にしないで」

『誰も』ではないでしょう」

一郎は外の夕日を見ている。

「あの男は君に助けるだろうか？」

「ああ、彼が」

零一は手をポケットに伸ばして、中の飯を何回も擦っている。

入院していた時、このカードが突然零一の枕のそばに現れた。その間に何度も見た。白いカードの上に、ただ一つの漢字がある。

陵（りん）。

「普通の読み方が違うな……」

「何を言いた？」

「いや、独り言だ、気にしないで」

ショルダーバッグを背負って、一郎と一緒に教室を出た。

「そう言えば、一人暮らしを始まだ？」

「あ」

「どこ？」

「これは……引越しが終わったら、また教える」

「そんなに神秘？」

一郎の疑問には、笑って話さない。

「じゃ僕はここへ、まだ明日」

「えん、まだ明日」

手を振って一郎を見送った。周りに誰もいないことを何度も確認した。

「……よし」

カードを手にとって、隣の交差点を見ている。

「本当にこんなに簡単？」

零一は元の場所に立って、道に沿って七歩歩いて、一歩歩くごとに、心の中で陵を黙念して。

最後の一步を歩くと、目の前の景色が変わり、一つのマンションが目の前に現れた。見た目は五階建ての普通のマンション。乳白色の外壁は、一回に四つべランダがある。対称性を考慮して、各階に八つの部屋があるべき――すぐにこの考えが間違いことを知っ

ている。

「退院したか？おめでとう」

魔法のような経験に驚きつつ、慣れた男性の声が前から聞こえてきた。

マンションの前に、男の姿が現れた。短い黒髪、ちよつとハンサムなアジア人の顔。上半身は何の飾りもない黒い半袖を着ている。下はカジジュアルパンツで、運動靴を履いて、普通の大学生のように見える。

しかし、普通の大学生が何日間もあなたの夢の中に現れて、同じことを繰り返す話してくれる人はいない。

「あの……」

苦笑した。

「今夜は、その夢を見ないでしょう？」

「ああ、見ないだ」

彼は指を鳴らした。なんに見えないものが零一の体から離れて彼の手に戻ったような気がしません。

「じゃ、先に君の部屋を見に行きましょう」

彼に従ってアパートに入り。102号室の入口で止まっている。

「ドアノブに手を三十秒置いて、君が欲しい部屋のレイアウトとが家具を頭のなっかで

想像して入ればいい」

彼の話通りにして、ドアを開けたら、二十年間住んでいた寝室が現れた。

「お、そんなに地味ですか？もつとよく欲張ってもいいよ」

「あのさ」

零一はこらえきれず横に聞いた。

「この部屋は、どれぐらいの大きさになりできる？」

「どれくらい？」

陵は顎を撫でながら考えた。

「今一番大きいのは、城の一つに等しいでしょう」

「……」

今後はこのような問題を聞かないことにします。

「じゃそのまま、入口の監視室にいたので、いつでも呼んでください」

「監視室？」

「ああ、言えないの？」

陵は当たり前のような口調で言った。

「僕は、このマンションの管理人だ」

ちよつとびっくりした。

幽霊と戦う男。

他人の夢を自由にコントロールできる男。

マンションの管理人？

「陵は零一の信じない顔を見て、ただ笑えて、もう一步の説明がしない。

「まあ、このマンションの不思議なことが多い、後で君はわかります」

「陵は振り向いて去った。

「あ、そう言えば、もう一つことがある」

「隣の人と仲良くしてください」

隣の人？

零一は振り返って隣を見たが、103室のドアを音もなく開けられた。いつそよ状況が始まったのか分からない。

その隙間の中によく知っている姿が立っていて、零一を見ていた。

半身男だ。

「その前のことが…本当にすみません…これから…よろしく願います」
マンションの中に、零一の悲鳴が響いた。

怪異マンションに住んでいる

二、廃棄病院の男殺し

男の悲鳴が夜空に響く。

この声を聞いて人たちは、ただ布団にくるまって耳をふさぐだけで、あの惨劇の余韻を聞きに行きない。

「まだ馬鹿がそこへ行く?」

「いくら警告しても、あの人たちは全然気にしない」

「彼らを死なせてよ、少なくとも彼女の怒りを鎮める」

「そのままじゃ問題もう解決しない」

「誰か、誰か俺たちを助けて」

「……」

廃棄病院の中に。

血だらけの男は最後の呼吸をのみました。

顔、首、四肢、腹腔……全ては小さいな貫き傷で覆われている。

破損した「洋服を着た女子が両手でナイフを握って、死体の首を一气につき続けた。ナイフが落ちるたびに、彼女の目には血涙が溢れている。

部屋の外、病院の中に、他の四人の男の死体とまだ動いているカメラが点在している。女子の動きが突然止まった。彼女は両手を下腹部に軽くおいて、服の上で最も血の汚れが多いところ。

「……痛い……」

突然ですが、自己紹介させていただきます。

俺の名前は石井零一。

稲居大学の文学研究科二年生。

親友は高橋一郎。

前に一緒に登山した時、俺たちは本物の幽霊を見た。

いや、ただ俺だけ見えた。

幽霊に取りつかれるところを、謎の男が助けてくれた。

その後、その男は俺の夢の中で、怪異に接する体質があると教えてくれた。今はもう活性化された。

例えまだ家族と一緒に住んで、彼らを傷つける可能性が高い。

だから俺今、あの男が管理したマンションに住んでいる。

何で突然この話を言ったら、多分俺の命は、今ここに終わった。

廃棄病院の前に立っている零一は、そう思う。

すべては一時間前から話して。

マンションに帰る時、意外に陵が見知らぬ男と話しているのを見た。

このマンションに住んでもう一週間だ。でもまだ他の居住者が見えてない。

……隣の人のことを考えると、零一もそんなに他の人と会うことを期待していない。

陵に頭を下げて自分の部屋に帰るつもりだ。

「あ、ちょっといい」

陵の声が後ろから伝わってきた。

……何か嫌な予感がある。

「あの、陵さん？」

「零一さん最近暇でしょう？」

「いや、暇は暇だけど……」

「じゃ一緒に聞いて、この兄弟は今とても悩むな」

抵抗をやめて、意識して振り返るしかない。

「続けよ、鈴木さん」

「あ、はい」

鈴木さんは見えて真剣な男だ、返事したら、すぐに話しを続ける。

「……先言えたととり、昨夜もまた五人が死んだ」

「俺は帰ってもういい？」

「ダメだ、人の話をさえぎるな」

「……あの幽霊の由来は明らかになれたが、今俺たちを本当に人手不足で……」

「じゃ僕の信頼できる友を貸してあげる」

「陵さん」

嘘でしょ！先ほどの会話は全部聞きった！彼らは俺に殺人の野郎を解決させるよね！俺はただの普通の大学生でしょ！なぜこのことに関係に掛ける」

「陵さん！もうちよつと考え……！」

「いや、よつくり考えだぞ？今の君にとってこの事件は解決できると信じて」

信じてないもう大丈夫！

鈴木さんも！なぜ受け入れられそうな顔をしている？俺は何かの隠れたすごいキャラでしょう」

「確かに、危険はちよつと、本当にちよつとだけがある。でも零一さんならきつと解決できる。そもそも……」

陵さんの笑い顔にはきゅに圧迫感があった。

「前に約束しただろう？」

「……はい、喜んで」

ダメだ、父さん、母さん、俺の不孝を許す。

俺の人生は多分、今日に終わった。

「あの、そんなに悲観しなくても……」

零一は自分の遺言は話したとき、下から男の声が聞こえてきた。高山雄一——あの山の半身男、零一と一緒にこの病院にきた。

「大……陵さんはきつと君を害しない。あの人は本当に責任感多いの人だ」

「本当ならいいの……」

零一は目の前の病院を見て、何年も廃棄された建物は予想通りに壊れていない。大理石の床にはかすかにぼんやりとした影が見えて、埃の蓄積がない。玄関の近くにガラスの扉が二つあって、静かに別れて来て、来訪者を招待しているように。

「……ここ、まだ電気がある？」

零一はちよつと信じられない。

「調査する時は照明があつて、いいじゃん」

零一は雄一の話が正しいと認めざるを得ませんでした。ホールに入ってすぐにライトをつけると、ホール全体が証明に照らされて一望できる。本来緊張していた気持ちも落ち着いてきた。

「で、どこから調査する？」

零一は完全の初心者、調査と言っても具体的にどこから始めると思わない。壁の地図の前に立って、できるだけこの病院の構造を見ている。

「俺も……」

雄一の話中途までして、壁の地図に何か黒いものが浮かんできた。零一はまだはっきり見えない、大きな力で後ろに投げられた。すると鋭い音がした。

「大丈夫が！」

雄一の声の前から聞こえてきた。零一は地面に横になって、倒れた痛みを気にする暇もなく、真っ直ぐに前を見ている。壁の中に、「洋服を着た少女が上半身を伸ばし、手にはカッターナイフを握って、ぼんやりとそこに立っている。彼女の下に、雄一は警戒して相手を見ている。後ろの脊椎骨に目立っていない傷がついている。先ほどの衝突で残した傷だ。

「……男、二人」

少女突然口を開けた、もとはなめらかな声今は互いに摩擦するディスクのようで、とりわけ声がかすれて耳が痛くて、とぎれとぎれで、ごく短いいくつかの音節は彼女は何度も停止して、まるですでにどのように話することを忘れた。

「まだ意識がないか」

雄一は上半身を地面にくっつけ、後ろの脊椎骨が高くなり、蠍のような警戒姿で少女を見ていた。

「零——早速逃げて！この女はき……！」

も一度鋭い音がした。高くそびえる脊椎骨が突然倒れ、途中で蛇みたい突かれ、少女と戦った。白い脊椎骨が空に描いた曲線が真っ黒な姿を包み、時折鋭い衝突音が聞こえた。今のところ、雄一はしばらく少女に困り果てている。

シヨックで失った体のコントロールが徐々に戻ってきて、倒れていた零一は眠りから覚めたかのように全身が震え、その前に見落とした痛みも脳に信号を送り始める。

服がちよつと湿っぽい、さっきの冷や汗かもしれない。

自分が今何の役にも立たないことを知っていて、零一は思い切って雄一の指揮に従って、手足はそして使ったのは入口に向かって突き進んでいって、背後から少女の悲鳴の音が聞こえてきて、怒りと恨み両方もある、更に零一の全身の鳥肌が全て立ち上がり。振り向く勇気がなくて、零一はこのようにして病院の門を飛び出して、日光の下で立つまで、依然として全身寒気がして。

戦うの声でだんだん消えた。零一は心配する時、足元から人の頭をきゅうに出た。雄一は少し狼狽して地面から現れた。もともとは白くてきれいな骨の上に小さなひびが入っていた。先の戦いがどれほど大変だったかが分かれる。

「あの、雄一さん、先のことありがとうございます」

零一は心をこめて礼を言いた。

「……後にしましょう」

雄一はまだ病院の正門を見ている、語気がやや厳肅である。

彼の表情を見ていて、零一の視線も正門に向かって眺めていた。その後、心臓の鼓動が一瞬止まったような気がする。ガラスの扉の向こうに、その少女は静かに立っている。二人をじっと見つめている。

零一はやっと少女の姿を見抜いた。

柔らかい黒い髪が両頬に沿って離れ、青白い顔をしている。背の高い鼻筋、小さな唇、切れ長い目、どう見ても美人といえる存在。今は血の色を失った唇と全身真っ黒な瞳の原因で、とても邪気がある。彼女の持つているカッターナイフはガラスに傷をつけて、音もなく浮かんできた。

紺色のT服は、腹部の位置が黒くなり始め、不規則な痕跡が裾の下まで伸びている。明らかに、血の跡が乾いて残っている。

表情はずっと変わらないでしたが、彼女の黒い目の中から、激しい憎しみが見えた。零一たち二人に対する憎しみ。

でもどうして？初めて会えたでしょう？

「彼女は、ここから離れない？」

「ああ、地縛霊のタイプだ。中に入る時間は長くないので問題ない。逆に君は、大丈夫が？」

「え？」

雄一の口調がおかしいので、零一は聞いて呆然とした。この時になってお腹の暖かさに気づき、頭を下げてみた。服が破れていて、血が真っ赤な筋肉組織から流れている。「ああ、先、完全に避けられないが……」

足が急に軟らかくなる。失血の関係かどうかは分かりません。幸いにも雄一が零一を支えてくれた。

「心配するな、皮膚の傷だけだ。医者に縫合してもらえばいい。ちょうど、この廃棄病院に関することも聞いてみる」

「じゃ、早く行こう……」

傷口を手で押さえて、足を運んでここを離れる。零一は思わず振り向いてしまうと、自動ドアの向こう側には、その少女が立っていて、まっすぐに自分を見つめている。

「この傷、ナイフか？何が起きましたか？」

明るい白い照明下で、医者はヨード液で零一の傷を洗っている。ちくりと痛いので、

こまごまと息を吸っている。

「ああ、あの、ヤンキーと少し衝突した……」

「ええ、ヤンキーが」

医者はにやにやと笑って、そばから針を取って、傷口を縫い合わせ始めた。冷たい針が肌を通る感覚は奇妙な感じがある。病院にいるの原因で、ぼんやりしているうちに、零一はまたその少女の姿を目の前に見たようだった。

「兄さんはこの人ではないですよ？あなたもその廃棄病院に向かって来たか？」

「な……」

急に目的を言われて、意識的に立ち上がったが、医者に押されて帰った。

「動くな、まだ縫合中」

「は、はい。でも、なぜ知っている？」

零一はまじめに目の前の男を見ていると、外見は特別とは思えないほど、普通の中
年医師の姿だった。

「この町で、三年前からヤンキーが存在しないだ。兄さんよ。そしてその傷もう、何度
も見た。でも……」

そう言って、医者は顔を上げて、ちらほらと見た。

「そこから生きてあろいてきた人を見たのは初めて」

「……あの病院、有名なの？」

「有名？多分な。君も見ただでしょう、そこに何がある」

金属の擦れる音とともに、医者は針をもとの位置に戻した。

「終わった。最近お風呂に入れる時、傷が水に濡れないように気をつけてください。」

「待ってください。あの病院のこと、詳しく話していいの？そこで何が発生した知ってるでしょう？」

医者は黙って立ち上がって、窓のそばまで行って、静かに立っていた。しばらくしてから、やっとため息をつきた。

「せっかく逃げられたのに、なぜまだ帰りたくないの」

（俺も嫌ですが、仕事が終わらないと帰れないな……）

零一は心の中で噂を立てていますが、医者には言えない。雄一はずっとそばに腹パイになっていたので、帰ってきて陵に報告してもらえばヤバイ。

「ただ、問題を解決欲しい。先の話と考えると、彼女はもう二年間存在しているよね」

「解決……君ができる？」

医者は皮肉を言って笑った。

「もういい、勧めたが、命を大切にしないのは君自分のことだ。三年前のことを君に話してもいい、少なくとも君をはっきりで死ぬ」

三年前のこの町は、別の町と同じで。

勉強が嫌いで集まっている不良生徒たちもここに存在した。

あの夜、彼らはいつものように、「面白いこと」を探している。

ただ今回の獲物、反抗が強すぎる。

カッターナイフで切り傷された彼らは、血の刺激で理性を失い、押し寄せると、意識したとき、少女はすでに血の海に倒れていた。

他の人に発見されるのを恐れて、近くの廃棄病院の奥に死体を投げ込み、それを隠そうとした。

しかし翌日、その中の一人は姿を消した。

そして次の日もう。

「彼女は帰ってきて復讐した」

その憶測を信じていたヤンキーたちは、泣いて警察に自首し、すべてのことを自白した。でもあの病院の奥に、警察を何にも発見しない。そして、ヤンキーたちは次々と消えていく。他人の前で姿を一瞬消す人もいる。

最後の一人が消えた後、警察はその病院の前でヤンキーたちの首を発見した。すべての表情は深い恐怖を持っていて、血の汚れで覆われていて、彼らがどのような地獄

を受けたかは想像できない。

そして首の後ろ、病院の中、少女はそのままそこに立って、警察たちが恐る恐る首を持っていくのを見ました。

「その後、この町にはヤンキーになる若い人がいないの？」

「誰もそんな存在は二番目を発生しない」

医者はタバコを取り出して、火をつけようとしたら、何かを思い出して、立ち上がって窓を開けた。

「大丈夫が？」

「あ、どうぞ」

医者はタバコを深く吸って、長い吐息とともに、部屋には淡い煙が立ちこむている。「君のような人がここに来て、初めてじゃない」

タバコの火があるくなると、煙が医者顔を隠して、彼の表情が見えなくなる。

「でも、全部死体になった。あの子、男が大嫌い。今回は生きられて、次をきつとだめだ」
零一は口を閉じて、立ち上がって黙ってお辞儀をして、その後出てきた。後ろのタバコは医者の呼吸に従って、火の光が明るくて暗い。かすかにため息が聞こえた。

も一度廃棄病院の前に立って、あの少女の姿も見えない。

零一はポケットからお札を取り出し、上には分からない呪文がびっしりと書かれていて、出発前の陵の言葉の言葉を思い出した。

「緊張するな、簡単です」

陵の表情から見ると、自分は何か生命を関する仕事に行きたいのではなく、マンションの下のコンビニにカッププラーメンを買いみたい。

「幽霊や妖怪を出したとき、このお札を彼らに貼ったら、すぐに消滅する」

「じゃ、例えばあの幽霊に何か隠し事があって、死ぬまで罪がないなら？」

「その時で……」

「零一、零一？」

雄一の声が零一を思い出から呼び覚ました。

「大丈夫？先から集中力がないように」

「ああ、大丈夫だ。そいえば、高山君、一つ問題がある、答えを聞きたい」

零一の手がお札を擦り続け、ややざらざらした質感の紙が彼をリラックスさせた。「君にとって、あの少女は救いがあるか？」

「えん、どうかな」

前回の経験から、二人は今回の調査で気を付けて、できるだけ広いところを歩いて、少女の幽霊がまた壁を利用して突撃することを防止します。しかし、周りは静かで、少女は現れない。

「個人的には彼女に同情している。彼女最初も被害者の身分だなあ？でも、君も聞きた、この三年間彼女もたくさんの病院に入る人を殺した。その人たちは無罪だ。」

零一は話をしなかったが、雄一説は事実だ。二人が深く入るにつれて、周りの壁や部屋に奇妙な褐色の跡があり始め、不快な味もついてきた。経験がなくても、壁に飛び散る液体が何を意味するのかを彼は推測できる。

「……ひどいな」

雄一は天井を見上げ、その上にも枯渇した血の跡が広がっていた。零一は廊下の突き当りの手術室を見ていて、肌から吹き出した鳥肌が周囲の気温の異常な寒さを注意している。彼は確信している。少女は中で彼らを待っている。

畏か？

初めて現れた時、彼女は理知的な様子がなくても、策略を使うことができる？

「……気を付ける」

雄一はもう戦闘状態に切り替えた。下半身の骨は蛇のようにねじって旋回し、まるで極限まで圧迫されたスプリングのようにすぎの秒に飛びます。

「俺が彼女の相手をします。君は彼女の死体を探し出すだけで、お札を貼って、すべておわりました」

「そんなうまくいけばいいな」

零一は気を落ち着け、両手で手術室のドアノブおつかんだ。身を切るような冷たさが接触先から伝わってきて、僅か数秒で手が凍ったと錯覚した。歯を食いしばってドアを開けて、手術室の中に器具はとづくに消えていて、とりわけ広々としていることに見える。

その部屋の中心に、黒い影が静かに立っているが、足元には零一たちの目が集まっている。

少女の死体はそこに横たわり、両手を重ねて腹部に置き、まるで眠っているかのようだった。

その少女の周りに、九人の無首死体を取り囲む。すべての死体はびっしりと切り傷をつけていて、甚だしきに至っては広い範囲の皮膚が剥ぎ落とされたこともあって、露出した筋肉組織を時間が経つにつれて黒くなった。彼らの引き立てを通して、中の少女はとりわけ美しいと同時に、妙に怪しいとも見える。

「君……たち、出て」

相変わらず耳が痛くなるハスキーボイスですが、今回は違った感じる。零一の視線

と少女が向かい合って、暗い明かりを頼りに、少女の目の中が時々清明になったり濁ったりするのを見て、不安定な状態にあるようです。

「……交流できるが、君」

雄一の後ろに隠れて、零一は少女に話しかけてみた。

「先ほど……できる。君たち逃げないなら……私すぐに……攻撃します！」

少女は何かと戦っているようで、最後の文字を話すと、彼女の声が急に高くなった。零一は目の前に突然激しい風が吹いたと感じ、耳をつんざくような風の音とともに、少女も雄一と戦い始まった。

「男、男、男！男すべて死ぬ！」

憎悪が実体となりかけたハスキーの雄叫びお、密集した耳障りなぶつかり合いが、二つの影を再び戦う。一瞬の間に床と壁に深い傷ができた。零一はできるだけだけ後ろに寄って、戦場との距離をあける。傍観していると、戦況がどんなに激しくても、部屋の中央の少女の死体のそばは何の被害も受けておらず、少女は意識的にそこを避けているようだった。

そこだ！

零一は零一は自分が少女の正体を見つけたと確信する。この間勉強した関連知識では、地縛霊はある種の担体に憑依し、担体が活動範囲を制限された存在。

自分の死体は担体になる、それもよくあることだ。

目標を確認した、零一は深く息を吸い、部屋全体を観察し、戦場から遠い方向を選び、ゆっくりと部屋の中心に近づく。移動の同時に、彼はずっとその二つの影の動きに集中している。

ダーン！

壁に深い刃の切り傷が現れて、首から5センチぐらいの距離しかない。もともとは反対側にいた二つの姿が、突然自分の前に移った。頻繫に響く金属の衝突音によって、零一は自分の脳血管が破裂しそうになると感じた。

「安心して行く！俺が守る！」

雄一の声は頻繫な騒音の影響で、とぎれとぎれに聞こえるが、意外にリラックスした。零一はポケットの中のお札を触って、もう一度歩き出す時、動きがだいぶよくなった。でも、本当にそのものも、彼女を消しているの？

零一は迷い。少女の話を知ってから、ずっと迷っていた。

雄一も気づいたが、彼は何も言わず、零一に自分で選択をさせた。

少女は可哀想。

彼女はまだ十分長い人生を経験しているはずなのに、急に止まりました。

彼女は被害者、同じく、彼女は加害者。

病院の廊下にある悪夢のような血の跡は、何人の被害者が存在したの証明。

自分は本当に資格があつて、勝手に彼女を許して、あれらの罪悪を発生したことがないにする？

心理闘争の過程で、いつの間にか、零一は少女の死体の前に歩いてきた。

可愛い女の子だ。

一時的に自分の置かれている変な環境を忘れて、目には彼女だけが残っている。

「触るな！」

零一あ近づくとつれ、少女の心に秘められていた記憶がまた掘り返されてきた。零一の姿はその日のヤンキーたちと重なり、少女の憎しみはますます激しくなり、攻撃も狂気と凶悪になる。むしろ自分が怪我をしても、雄一の封鎖を突破して、自分の死体を手を伸ばしている男を殺したい。

絶対に、絶対に男に体を汚されてはいけない！

彼女の殺意を感じて、ヤンキーたちの死体も痙攣し始め、震える手を伸ばして零一を捕まえようとした。彼らは動作が遅いにもかかわらず、九人で行動し、零一の活動空間を大いに圧縮した。

「早く完成して！殺すなり救われるなり！」

雄一の声がいらだってきた。今は少女をさえぎるだけではもう大変だ。零一もつと

多くの助けを与えることはできない。

雄一に促された零一は、ようやく決意を固め、手にしたお札をパッと死体の額に貼り付け、前に陵を教えた呪文を口ずさむ。

「皇天を見る！後土で証を立てる！僕は自身を捧げて、彼女の自由を交換する！これから、彼女の因果は僕が背負う！浄魂呪！急急如律令！」

「お前！殺す！」

後ろの叫び声はとりわけすさまじく、冷たい殺意は零一に自分の関節が凍りついたように感じられた。しかし、彼はそのお札の紙をじっと見つめていた。呪文の詠唱が終わると、お札の表面がたちまち明るく輝いてきた。雄一は早くも予想していたように、事前に地下に隠れてしまい、光に照らされず、他の人はこんなに早く反応していなかった。ヤンキーたちの死体は光と触れるや否や、まるで雪が沸いたお湯をかけられたかのように急速に溶けてしまった。

零一は光に照らされて、自分の影がだんだん薄くなつて、完全に消えるまで発見された。

（これが、陵と言えた代価が？）

その考えが脳内に浮かんだとたん、黒い影が背後からぶつかってきて、零一の体を貫いて、光に照らされて、黒い蒸気が絶えず彼女の体から現れた。すべての黒い蒸気

お立ち上がりは、少女の悲鳴とともに、とりわけ苦痛であった。

「そこを離れて！それは彼女の恨み、触ったら気が狂ってする！」

「あの、多分無理……」

零一の語気は少し苦くて、自分の足元をじっと見ていて、いつの間にか、少女の魂体はすでに自分の足と繋がっていた。自分が動くと、少女も一緒に移動してきて、距離を置くことができない。

「……」

雄一も黙っていた。今の状況では、どうすればいいが分からない。

少女の体から出てくる黒い蒸気はますます多くなり、零一は手で鼻を覆っても無駄だ。少しずつ溢れ出る黒い蒸気が彼の五官の穴に沿って彼の体の中に入ってきた。一瞬で、零一の脳内に大量の情報が流れ込み、思わず大きな声で叫んで頭を抱えてしゃがんでしまった。

赤い。

すべての記憶の中に、全部赤い。

まるで世界自身が血に浸されているかのように。

真っ赤なこの世界で、少女は逃亡した男性を何度も追い続け、殺していく。

呼吸を止めても、少女は機械的にカッターナイフを繰り返して死体に突き刺す。

記憶を通して伝わってくる共感は、少女にははっきりとした自己意識がない、心の中にはただ一つの考え…

「男、死ぬ」

真つ赤な記憶は潮のように色褪せ、零一はぱくぱくと息づいている。いつの間にか、服は汗でびしょぬれになった。この時零一はやつと発見して、部屋の中で静かで、お札の光もすでに消えた。

「おい、大丈夫か？」

零一の足元で、雄一は小心に当た頭を出して、声を出して彼の様子を探れた。例え状況がヤバイ、雄一はすぐに逃げて、陵に問題を解決させるつもりだ。

「……大丈夫……そうじゃないな」

零一一度は立ち上がってみましたが、体がだるくて、思い切って床に座って、体力を回復するのが早い。

「見ました」

「彼女の記憶でしょう？もちろんだ。それらの黒い気あもともと彼女の恨みを持つ魂の断片。君がみた後も理知を保つというのは不思議だ」

不思議か？

零一は先ほどの赤い世界を思い出して、抑圧、いらいら、目いっぱい赤い色はひっ

きりなしに人の心の深くの最も暗い考えをからかっている。思わずぶるぶる震えた。

「君、すごいな。あの赤いな視点でこのような理性を維持できる。」

「赤い？」

雄一はちよつとわけがわからない。

「何を……」

「君たち、一体何人？」

雄一の話はまだ終わらないうちに、冷たい女性の声に中断された。二人は同時に振り向いて、零一の影をもう少女の姿になった。先の言葉は影から伝わってきた。

「まさか、陰陽師か？そうですね、私みたいな幽霊が存在するなら、陰陽師も本当の存在の可能性が大い」

零一たち返事がないのを見て、少女もあまり気にしていない様子で、勝手に推測を進める。この時、彼女の声は正常に戻った。不自然な停滞もなく、ハスキーの感じもない。

「ならば、彼は君の式神？先のお札も、君は強い陰陽師間違えないね？でもエネルギーお感じられないね、先ほどつかいましたか？」

零一は自分が話をしなくてはいけないと思う、でなければ少女を放って話を続けていると、いつまで終わるの？

「この子本来はそよう性格か？」

一時はこの活発な少女を前のさつきなイメージには対応できない。

「あの、僕は陰陽師じゃない、彼も僕の式神じゃない。僕たちは……」

零一も自分の身分をどう紹介すればいいのかわからない。最終的にはこのセクシオンをスキップする。

「とにかく、僕たちは今回の事件を解決するために来たので、今を見ると、成功……かな？」

最初はこの幽霊お嬢ちゃんを退治すると言っていたから、今は浄化してもいいですよね？

「へーイ、成功か？」

影は突然消え、再び少女の姿に戻り、零一の足元に止まった。この時、二人の体はほとんどびったりくっついていて、少女は両手を腰に当て、不満な顔で零一を見上げていた。

「じゃ、これも君の計画でしょう？ 変態」

「いや、これは意外……」

零一は虚ろに目をそらした。彼もこういう結果が出るとは知らなかったからです。「陵さんと頼みましよう。彼は絶対に解決できる。」

雄一が雰囲気のを和ませてくれた。

「リン？」

「まあ、すごい人だ。先のお札も彼が作る。今君も他の選択がないでしょう？」

「ううう……」

少女は歯を食いしばって、ちらつと零一を見ました。

「しょうがないな！」

「あ、そいえば、君の……死体、どうする？」

この問題を持ち出した時、零一は全身の違和感を覚えたが、思い切って聞きました。

少女はあつげにとられて、気分が落ち込んで、話をするのも少し退屈だった。

「……警察を呼んで、後で彼らに頼む。父さんと母さん、きっと……」

自分の表情を誰にも見せたくないというか、少女は再び影に姿を変えた。

「あの、君の名は」

「……神無羽奈」

「で、君たちが彼女を連れて帰った？」

陵はこめかみを揉んで、目の前の三人を不思議そうに見ている。

もともとは簡単な仕事なので、自分でも占って、危なくないから任せた。

なんぜ彼らは自分でこんなに多くの芝居をすることができるか？

初めて外に出たら、女性を連れて帰る？

「あの、陵さん、何が悪いの？」

「悪いは悪じゃない……先言いた、彼女の記憶視点、世界は真つ赤の？今は？」

陵の視線は羽奈に向けられ、羽奈は一步後ろに下がり、首を振った。

「今は正常だよ」

「へーい、そうか」

(意外な収穫な、だからあいつはずっと処理しないか？)

陵は目を細めて、口元に微笑を浮かべた。そして手を空中でこぎまざると、零一と羽奈は二人の接続が切断されているのを発見した。同じ範囲に制限されなくてもいい。嬉しそうな顔をしていた羽奈をよそに、陵は真剣な表情で零一を見ていた。

「前はまだ迷っていましたが、今は僕について勉強しなければならぬ……運がいいかどうか言えないな」

「え、勉強？」

「そうだよ、君の影もないだろう？影は命存在の証明。あれがないなら、君はすぐにこの世界を認めない、消えるぞう。」

零一はすばやく自分の体お触って、自分が消えそうな気配あないかを確認した。

「大丈夫、このマンションの中にはそのような問題がない、だから君たちを分離できる。でも外に行くのは、まだ一緒にしかない。」

「まだ?！」

あるの少女が悲鳴みたい、気にしないで。

「僕と道術を学んで、君が十分に強大になるまで待つて、法力を使って自分の世界の中の存在の痕跡を深めて、抹殺されることはできないだ。でも今は……」

「陵は三人を見て、口調が穏やかになる。」

「ゆっくり休んで」

「すべての部屋で選ぶできるの?」

「一階だけね」

「ねね、君は何番の部屋」

「ここ」

「零一は102番のドアを開ける。もう疲れたら、早く横になって休みたいだけ。」

「……ええ」

「羽奈は口をとがらして、雄一が隣の103番に入るのを見ていた。」

「もう隣の部屋がない!」

「いや、101番はまだ……」

「そうだ！そうしよう！」

羽奈は急に振り向いて、真向いの壁に手を壁に置いて、何かぶつぶつ言っている。

「あの、だから部屋はまだ多……嘘……」

壁には一つのドアが浮かんでいる。その上には104番の看板が掛けられている。ただ、あの看板は他の薄い金色の番地と違って、赤い糸がつながっているようで、特に目障りだ。

「じゃまだ明日！」

羽奈は何か違いに気づかなかったようで、嬉しそうに振り向いてあいさつした後、ドアを閉めて、驚いた二人の男だけを残してお互いにめを合わせて。

管理室内、陵は壁に出している104番の赤い番号を見て、口元の笑顔の幅がますます大きくなる。

「本当に、面白いな」